

椎名麟三「罪なき罪」論

—キリスト教文学者の推理小説—

金慶湖*

(e-mail : kkhbtfy@hanmail.net)

<目次>

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. はじめに | 3. 二つのテーマ |
| 2. 「原型」をめぐって | 4. むすびに |

キーワード：椎名麟三(Shiina Rinzo), 推理小説(detective novel), イエス・キリスト(Jesus Christ), 復活(Resurrection), 絶対(Absolute), 相対(Relativity), 二重性(Duality)

1. はじめに

「罪なき罪」（昭和二十九年）は、椎名麟三の初めての推理小説である。初出誌「文芸」は〈推理小説特集〉として、中村真一郎「不可能な逢引」、阿部公房「パニック」などを一緒に掲載している。この時期の戦後派作家は「泰平すぎて、みんな退屈している。戦後派の諸先生がたも、近頃は一向に華々しくない」¹⁾、「彼らの年齢は増し、技法的には成長したが、技はあらぬ方に振曲げられ、わい小な盆栽のような文学になってしまった」²⁾、「社会が見かけの安定を示してくるに従って、次第に後退していった。そして、今日では危機感というものがほとんど失われてしまっているのだ」³⁾とされることが多く、戦後派作家の風化に対する懸念は深まりつつあった。しかし、文学史的には言わば「推理小説ブーム」を迎え、椎名も「待合室」（昭和三十年）、「被害者」（昭和

* 韓南大学 日語日文学科 講師

1) 山本健吉(1955.12.)「一九五五年の収穫 注目された今年作品(一)」「文学界」

2) 奥野健男(1956.9.)「文芸時評」「群像」

3) 進藤純孝(1956.8.3.)「危機感の喪失 八月の小説から」「北国新聞」

三十一年)、「新作の証言」(昭和三十二年)などの推理小説を次々と発表している。キリスト教入信後の椎名の思想的転回や作風の変化をめぐって、それを「後退」とみるか「成熟」とみるか評価が分かれる一方、その賛否両論の狭間で、椎名は新たに推理小説へ傾倒していったのである。本稿では、未だ十分に検討されていない椎名麟三の最初の推理小説「罪なき罪」を分析し、それが椎名のキリスト教文学においてどのように働きかけているかを考察する。この作業により、椎名のこのごろの営みが一時のブームに便乗した風化であったのか、それとも新たな苦闘の始まりであったのか分かってくると考えるのである。

2. 「原型」をめぐって

「罪なき罪」は、昭和二十九年二月号の雑誌「文芸」に発表された。目次には「いわばねずみが猫をとった事件……貧しい実直な庶民の生活感情を、いつもユーモラスに、うら悲しくうたう椎名文学！こんなユニックな推理小説もあるのだ!!」と書かれている。

この小説の登場人物は姉(岩代志津)、弟(広和)、簡単な買い物ができるように志津になつかれている犬(バラバ)、近所の少女(信子)、姉の昔の恋人(高倉菊男)、弟の恋人(赤川牧子)となる。弟は十歳以上年の離れた姉に育てられ、今は大学を出て町の工場で働いているが、恋人に結婚を迫られながらも、自分のために結婚もせず、一生をつくしてくれた姉への罪意識から、なかなか姉に結婚の話が出来ない。ある日、ずっと様子のおかしかった弟は、レモン・ジュースの粉を買って来たと言い、砂糖を探し、やがて二つのコップを持って入ってきて、その中の一杯を姉の前で飲んだ。姉は弟が自分を毒殺しようとするのを直感したのだが、飲み始める。味が苦かったので、弟のように飲み干すことは出来なかったにしろ、とにかく飲んだからいいだろうと思った。その翌日、死んだのは弟のほうであった。弟を毒殺した疑いで逮捕された志津のために、十何年前、彼女に結婚を申し込んだ昔の恋人が警察署に現れて証言したいと言う。しかし「志津さんは、いい人です！」というのが証言だったので、そのまま追い出される。彼は途方に暮れて、志津の家に向かい、志津の飼っているバラバと近所の少女の信子に会うのだが、そこで「死にたい」と言う志津のために、信子がお母さんに「死ぬ薬」と注意されていた瓶から薬を少し新聞紙へあけ、それをバラバの首の風呂敷包みに入れてやったことが分かる。

その後、彼は駆け足で弟の工場や薬局などを走り回り、夕方、警察署に向かう。その夜、志津は釈放された。そして、疲労で寝ている志津に昔の婚約者はこう言う。「ほんとは、弟さんを殺した犯人は、あなたなんです。あなたは、自分の不幸な運命を絶対視しすぎるんです。いわば、あなたの頭のなかが犯人なんです。 (略) 弟さんは、自分が結婚すれば、あなたが世界でも失ったように、生きるのぞみを失って、苦しみながら死ぬと考えなされたのでしょうか。 (略) 弟さんは、病身のあなたがそんな風になるのを見るに忍びなくて、あなたのコップへ青酸カリをいれたんです。ところが、そのコップには硝酸銀が入っていたので、青酸カリは金属塩になってコップの底に沈殿し、あなたは、その沈殿物に気がづかなかっただけなんです。 (略) でも、あなたが、自分の不幸を絶対的に考えて、バラバラに死にたいなんていわなかったら、弟さんも死ななかったんです。」

弟が死に至った経緯をまとめ直してみると、こうなる。弟が姉の志津を毒殺しようとし、二つのコップを用意した。一方にはレモン・ジュースと砂糖を、もう一方にはレモン・ジュースと砂糖、そして青酸カリを入れた。そして青酸カリの入っているほうを姉に飲ませた。しかし砂糖が入っているとばかり思っていた包みの中には、なぜか毒物の硝酸銀が入っていた。

「死にたい」という志津のために近所の幼女が親切から入れてやったのである。それで的外れの弟のほうを飲んで死んでしまう。幼女の硝酸銀か、弟の青酸カリかで殺害されるところであった姉は、硝酸銀が青酸カリと化学反応を起し、金属塩になって沈殿したおかげで、両方の毒物のどちらも飲まずに生き残ったというわけなのである。

この、殺人事件の裏にある、一般読者がよく知らない化学式を利用した巧妙な、しかしいささか強引な「トリック」に関して、「この材料で二、三百枚ぐらい書いたら、世界推理小説ベストテンぐらいに入るにちがいない」⁴⁾とまで激賞している論者もいる。また、トリック諸々に関しては「突飛さ」を感じなくもないが、小説の醸し出す悲哀感などにおいては、梅崎春生のような論評もある。

環境描写が、椎名氏一流のもので、そのリアリティが、筋の突飛さを救っている、——とこう書くと、平凡極まりない感想だが、小説全体を覆っている、疲労した夕暮のような空気のなかで、ちょっと出て来て犬を可愛がる幼児などが、妙に印象的に読後に残るのは、この作品の成功であることを証明しているのだろう。椎名氏の文学は、所謂、客観的リアリズムの手法とは異なっていて、その迫真性の保証は、専ら雰囲気密度にかかっている、ということはこの作品は改めて認識させてくれた。⁵⁾

4) 花森安治(1954.1.28.)「私の文芸時評」 「読売新聞」

客観的リアリズム、いわばゾライズムとは違った、「雰囲気の密度」に支えられ、物語の「迫真性」が獲得できていると、椎名の仕事を積極的に評価したのである。

しかし、椎名の小説に関する評価が常にそうであるように、辛辣な批判も少なくない。たとえば平野謙は「こういう企画とそれに応ずる作者の態度を一括して、文学のダラクなどヤボなことをいうつもりはないが」、「椎名も参加している『文芸』の推理小説特集は、ほとんどすべてが推理小説ではない」⁶⁾と述べている。また、佐々木基一は、「『推理小説』特集と銘うった企画に引きずられて調子を落したためかとも推測されるが、中では椎名のがスリラーめいた話の運びがうまい。この人は実に器用人だ。しかし、グレアム・グリーンに向うをはって、エンターテインメントなんかに暇をつぶすより、やはり『自由の彼方で』（新潮）のような力のこもった仕事に専念してほしいと希うのは、筆者ばかりではあるまい」⁷⁾と述べており、つまり、この椎名麟三初の推理小説は、「ほとんどすべてが推理小説ではない」と頭から否定されたり、グレアム・グリーンを真似た暇つぶしほどに片付けられたりしたわけである。

この、グレアム・グリーン（一九〇四～一九九一）は、『スタンブール特急』（一九三二年）、『権力と栄光』（一九四〇年）『第三の男』（一九五〇年）などで知られるイギリス出身の小説家で、スリリングな展開の中で神や信仰、カトリックの倫理をテーマに据えた作品を多く発表した。長年ノーベル文学賞の有力候補と言われ、実際に一九五〇年には候補としてノミネートされるなど、当時の日本でも非常によく読まれており、佐々木が、このようなグレアム・グリーンと同じ信仰をもつ椎名を（厳密に言って椎名はプロテスタント）スリルの中で人間の内面世界に迫り神を問うという、グリーンなじみの手法を模倣したのではないのかと、「グリーンに向うをはってエンターテインメントなんかに暇をつぶす」と揶揄したのも無理もない。が、少なくとも、この「罪なき罪」においてはグレアム・グリーンとは無関係である。

というのも、この小説に影響したと思われる作品について、齊藤末弘が「原型は、十九世紀イギリスの推理作家チェスタートンのものである」⁸⁾と『全集』の解題にはっきり書いているのである。実は、ここのチェスタートンを「原型」にする点において、果たしてそれでいいかどうか、また、どこまでを「原型」として見ればいいかなどの話をこれからするつもりだ

5) 梅崎春生ほか(1954.3.)「小説月評」「文学界」

6) 平野謙(1954.2.2.)「二月の文芸作品を読む」「北海道新聞」

7) 佐々木基一(1954.2.1.)「文芸時評」「日本読書新聞」

8) 齊藤末弘(1971)「解題」、椎名麟三『椎名麟三全集5』、p.533.

が、一先ず、チェスタートン（一八七四～一九三六）は、イギリスの文芸批評家で、彼の推理小説の中で「ブラウン神父」という独特な探偵を創造したことでよく知られる。このブラウン神父の物語は、小柄で丸顔のカトリック僧侶ブラウン神父を主人公とする短篇シリーズで、一九一〇年九月〈ストーリーテラー〉誌に発表された「青い十字架」から、作者の死後一九三六年八月〈ストランド・マガジン〉に載った「村の吸血鬼」まで全部で四十九篇を数える。ブラウン神父の外見は、顔はノーフォークの団子にそっくりにまんまるで間抜けがおしており、大きなみすばらしい傘を持っているが、それがまたひっきりなしに床に倒れるような様子である。およそ犯罪と無縁の外見であるが、するどい推察力で犯罪者の心理や手口を見破り、辛辣な警句や逆悦の魅力と相俟って、ポオのデュパン、ドイルのホームズとともに世界三大名探偵のひとりに数えられる。齊藤がこのシリーズを「罪なき罪」の「原型」としたのは、この探偵の「間抜け」な外見と明晰な推理能力の乖離、そして何より、キリスト教の教えが暗示されているところから来ているのかも知れない。しかも、椎名も次のように綴っており、チェスタートンの「ブラウン神父」物語に対して作家自身親愛の感を抱いていたことが分かる。

私の好きな推理小説のなかのひとつにG・Kチェスタートンの一連の「師父ブラウン」ものがある。カトリックのお坊さんが登場して来て怪事件の謎をたちまち解いて見せるという小説なのであるが、その名探偵ぶりは、シャーロック・ホームズの型に追随しているといわれても仕方がないだろう。しかしホームズとちがった人間的な魅力が、この師父ブラウンにはあり、それが私たち読者を手もなくひきずって行くのである。9)

しかし、椎名はブラウン神父の人物の造形に関しては魅力を感じつつも、小説としての構成に関しては必ずしも肯定していたわけではない。

もちろん「師父ブラウン」には、皮肉なところがある。そしてこのブラウンにやらせて見せたさまざまな推理は、作者の推理小説全体に対する皮肉だと考えられないことはない。小さな事実から、奇跡に近い密室殺人事件の行われたただ一つの可能な状況を組立てる。その状況が犯人の姿を示すことになるわけなのだが、しかしそれらの推理小説の探偵たちの、小さな物的証拠から推理して組立てる状況というものは、いかにもいい

9) 椎名麟三(1959.4.)「推理小説と聖書」雑誌「指」(ただし引用は、椎名麟三(1975)『全集』17、冬樹社、pp.172.~173.)

加減なものであり、犯人という答えがでるからいいようなものの、その小説の提示する証拠としての事実からは、他のちがった状況がいくらでも組立て得ると皮肉っているようにも思われるのである。10)

つまり、探偵役のブラウン神父の人間的な魅力はともかく、小説のなかの推理が提示する「状況」の「組立て」というのは「いかにいい加減なもの」なのかと「皮肉」さを感じていることが分かる。こう見ると、果たして椎名は「はじめて推理小説として依頼されて」11)、このような「いい加減な」「組立て」のものを「原型」にし「罪なき罪」を書いたのであろうか。

3. 二つのテーマ

ところで、椎名麟三の昭和二十七年の『創作ノート』には次のような記述があるので、注意を引く。

「十二人の評決」(略) 男と女、毒薬を飲む。女、解毒剤を飲む。(こんなもの飲むぐらい何でもないわ。そんなにこんなものを飲む、ということがあなたにとって大切なの?) 男だけが死ぬ。「観念が犯人である推理小説」12)

この「観念が犯人」という箇所は、「ほんとは、弟さんを殺した犯人は、あなたなんですよ。あなたは、自分の不幸な運命を絶対視しすぎるんです。いわば、あなたの頭のなかで犯人なんですよ」といった「罪なき罪」のモチーフそのものと思われる。

『十二人の評決』(一九四〇)は、チェスタートン同様、イギリスのジャーナリストであったレイモンド・ポストゲート(一八九六～一九七一)の推理小説で、全体で三部に分かれている。第一部はある殺人事件の裁判に臨む十二人の陪審員たちのプロフィールで構成されている。陪審員は一般市民の中から無作為に選ばれるので、誰もが心の底から喜んで応じるわけではない。ここでは十二人の職業や経歴、思想などが書かれ、第二部

10) 前掲注9) p.173.

11) 前掲注8)

12) 椎名麟三(1982)『創作ノート』No.(2)、菁柿堂、p.9.

では、裁判の争点となっている殺人事件の描写である。祖父から莫大な遺産を相続した十一歳の少年と、その後見人役を努める叔母が登場し、互いに腹を探り合うような静かな心理戦を繰り広げてゆく。ここで叔母は、少年が可愛がっているペットの兎を、オーブンで殺してしまうのである。やがて事件が起こるのだが、一緒に食事をした二人の中、少年だけが死ぬ。第三部では審理が最終段階を迎え、陪審員が控室で評決に至るまでが描かれる。叔母は結局無罪で釈放されるが、少年が叔母を憎しみ、自分と叔母を両方とも中毒死させようとしたところ、少年だけが死んだのであった。この、一方だけが死ぬという事件の経緯や、少年が毒である蔦の花粉を「かきあつめる」という箇所など、椎名の「罪なき罪」と酷似しており、「罪なき罪」の「組立て」上の「原型」というのであれば、ポストゲートの『十二人の評決』がそれに近いと思われるのである。

この小説の探偵役の菊雄が志津に事件の真相を説く時、「ほんとは、弟さんを殺した犯人は、あなたなんです。あなたは、自分の不幸な運命を絶対視しすぎるんです。いわば、あなたの頭のなかで犯人なんです」と言ったが、この小説のテーマは、一先ずこの「不幸な運命を絶対視しすぎる」ことへ警戒だと言えよう。「絶対視しすぎる」、この「絶対」との戦いというテーマは作家馴染みのもので、椎名の代表作とされる「邂逅」（昭和二十六年）や「美しい女」（昭和三十年）などの中心を成すテーマであったわけだが、この「絶対」との戦いというのは如何なるものであろうか。これを知るためには、椎名のキリスト理解の特徴を掴んでおく必要がある。椎名にとっては、キリスト教義の核心は、何よりもイエス・キリストの「復活」であるが、そうしたイエスの「復活」を、椎名はどのように把握しているのであろうか。彼の説く「復活」の性格が端的に表れている文章がある。次がそれである。

同時に死んでいて生きているイエスの二重性は、私が絶対と考えていたこの世のあらゆる必然性を一瞬のうちに、打ちくだいてしまったのである。

なぜならそのイエスは（略）十字架にかかれ、二日半も葬られていた（略）死んでいるイエスである。しかし「ほんとうに」死んでいるイエスかというと、生きておられるイエスなのである。（略）私たちの考える二つの絶対、生の絶対性と死の時間の絶対性（略）を超えて存在しておられるのである。私たちの絶対的な必然性と考えている壁がここではくずれ落ちている。しかしそれこそ「ほんとうの自由」というものではないか。¹³⁾

13) 椎名麟三(1966.4)「「復活」と私」雑誌「信徒の友」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』20、冬樹社、p.260.)

椎名の説くイエスの「復活」とは、一度は「死」んだが、今は蘇って「生」きたとする問題ではない。上の引用文で述べているように、「同時に死んでいて生きている」という「二重性」を帯びたものでなければならない。つまり、「死」であると同時に、「生」でもあるわけである。

椎名の世界においては、彼のこのような理解により、ある一方で「絶対的」であったものは、もう一方と相殺するか対峙するかで、もはや「絶対」ではなくなる。つまり、「生」か「死」か、どちらか一つしか無い「絶対」ではなく、「生」と「死」の両方がキリストにより「等価値」とされ、「同時」に存在する、あい対する「相対」的なものになる。唯一無二だった「絶対的」な猛威は無力化し、「私が絶対と考えていたこの世のあらゆる必然性を一瞬のうちに、打ちくだいて」くれるのである。このような、椎名特有の「復活」理解を、ここでは推理小説という形式を借りて、もう一度繰り広げたのである。作品の最後に探偵役の元彼氏が主人公の志津に「あなたが、自分の不幸を絶対的に考えて、バラバに死にたいなんていわなかったら、弟さんも死ななかったんです」と言うときの「絶対」、そしてそれに捕らわれてしまうということは、イエス・キリストの「復活」によりその解決が啓示されているのに、何故あなたは「クリスチャン」と名乗りながらも「復活」の意味を知ろうともせず、不幸を「絶対視しすぎ」、破滅に向かってしまったのかということが暗示されているのである。

もう一つ、志津が「クリスチャン」として登場しているのは、イエスの「復活」をより明確に力説したいという理由の他にも、もう一つ、「悪」に対しての問題も絡んでいる。それについて考えるためには、江戸川乱歩の書いた『十二人の評決』への解説に触れなければならない。

中心題目となる殺人事件も非常に変わったもので、「可憐なる残虐」とも形容すべき味が、私には異様な魅力であった。(略) どうもこの奇妙な味を形容するのはむずかしいが、仮に云ってみれば一方では小児の可憐と残虐との組み合わせ、一方では軽いユーモアと極悪との組み合わせ、(略) そういう二つのものをひっくるめた奇妙な味である。繰返すようだが可憐であるが故に、又ユーモラスであるが故に、よく考えてみれば普通の残虐よりも一層残虐であり、或は普通の悪よりも一層悪なのだが、しかし、表面上はそれほどに感じられない、というような味である。ポストゲートの「十二人の評決」の中心テーマにはこの味があり、私にはそれが最大の魅力である。¹⁴⁾

14) 江戸川乱歩(1954)「解説 英新本格派の魅力」レイモンド・ポストゲート、宇野雄訳『十二人の評決』早川書房、p.277.

江戸川乱歩は、『十二人の評決』には「奇妙な味」があり、それが「可憐と残虐」「軽いユーモアと極悪」といった、この似つかわしくない二つの「組み合わせ」によりいっそう「残虐」で「極悪」を感じさせると評している。確かに、この小説の緊張感と濃く残る後味はこのギシギシとした克明な対比からなのかも知れない。しかし、このことに対し、椎名は次のように書いている。

ただ僕にとって興味があったのは、事件の容疑者であるフォン・ベア夫人の存在であった。子供の可愛がっていた兎を故意にオープンの中へ押し込め、それが喚き苦しんでいるのを尻目に、子供がなかへ入らないように頑張っている。しかし彼女はそれをその子供のためになしているのだと信じている点—そこには他人の死に決定的な無関心さが表現されている。彼女はそのとき、一個の歴史であり一個の自然である。しかもそれが人間の善意において行われている点に、無邪気な惨酷があるのである。(略)

江戸川乱歩氏によれば、フィリップ少年を可憐な惨酷—妙な味—として考えている。だがそれは可憐な惨酷ではない。少年の場合、明らかにファン・ベア夫人に対する復讐に根拠をおいているからである。(略) 15)

つまり、江戸川乱歩の感じた「可憐」というところが、椎名にとっては「無邪気」に映っていたかのように響くのだが、実は把握の方向性がまるで違っていた。江戸川が「残虐」「極悪」としているのは他でもなく、少年のウサギを焼き殺したり、解毒剤を飲んだりして少年だけを死なせたフォン夫人のことであった。それに対し、椎名は、少年のほうを、その復讐の殺意を「悪」としてとらえているのである。そこで、椎名は『十二人の評決』を彼の考える望ましい方向へ脚色を始める。

ファン・ベア夫人はそのフィリップ少年が「葛の花の花粉」をサラダのドレッシングのなかへ入れるのを見ていた。彼女は、その毒のことを知っていた。フィリップ少年は、それを食べた。彼女はその少年の目的にそってやるのが愛だと感じた。(そこに財産というものがからんで来るが、それに対する決定的な無関心として) 彼女はそれを食べた。二階へ上って来ると、胸からくらくらした。死。自分のしたことが急にくだらなくなって咽頭へ指をつっこんで吐いた。しかし少年の方は死んでしまうという風にすればよかった。しかも彼女は、少年の死に少しも罪悪感をもたない。とにかく少年の食べさせてやろうという目的にそ

15) 前掲注12) p.3.~4.

てやったからである。—彼女は財産を手に入れて、余生を幸福におくった。少年へ感謝しながら。16)

婦人は全てを知っていながらも少年への「愛」のために毒を飲むというところへの脚色は、そのまま「罪なき罪」で具現されたと言えよう。椎名の言う、この「愛」とは家族への愛情などを超えた宗教的な「愛」として表れる。椎名は、小説の主人公の志津を「クリスチャン」として登場させ、「キリストは、悪いものに手向かってはならないと知っているのだ」、「キリストは汝の仇を愛せよ、と知っているのだ」と彼女に言い聞かせている。つまり、志津の「愛」とは、弟への「愛」ではなく、キリストの教える「仇を愛せよ」の「愛」、「手向か」わずにして、仇の「目的にそってやること」としての「愛」なのである。椎名がこの小説で言いたかったのは、この、イエスの教えの「仇」への「愛」だったのであろう。

4. むすびに

本稿では、椎名麟三「罪なき罪」を論じた。先ず、この作品のテーマは、不幸やものごとを「絶対的」に捉えることへの警戒であり、それは椎名特有の復活信仰と関わっていた。椎名の言う「復活」は、「二重性」という言葉で書き換えられるのだが、その「二重性」とは、「死」と「生」という、二項対立し、決して相容れないもの同士が、イエス・キリストの「復活」により、同時に同じ次元でおさまり、並立できるようになったとする信念である。この椎名の「復活」理解を基に、推理小説のもつ「迫真性」の獲得を試みつつ、イエスの説いた「悪いものに手向か」わず、「汝の仇を愛せよ」の教えを伝えているのである。椎名はこの最初のもの以来、数多い推理小説を書き続けたわけだが、これらによって、どのように自分の文学世界に新たなベクトルを開いていったのか、今後の課題として論究してみたい。

富岡幸一郎は『戦後文学のアルケオロジー』で、「椎名が、「下層庶民の生活や心理の二十年にわたる推移」を「えぐり出す」場所を掘りつづけたならば、椎名文学はおのずから時代（歴史）的な限界性を持たざるをえなかったろう」とし、「今日から見れば、

16) 前掲注12) p.3.~4.

椎名がそこにとどまらなかったことの方がはるかに重要である」¹⁷⁾と、椎名が変化を絶えずに求めたため、時代性を越え得たのだと、椎名文学が変貌で獲得した価値はもちろん、そうした変貌への試みじたいに意義があると説いたわけだが、椎名の様々な「推移」の相の一つである、推理小説への新たな試みもなお、もう一度再評価されるべきであろう。

【参考文献】

- 梅崎春生ほか(1954.3.)「小説月評」 「文学界」
江戸川乱歩(1954) 「解説 英新本格派の魅力」レイモンド・ポストゲート、宇野雄訳『十二人の評決』早川書房、p.277.
奥野健男(1956.9.)「文芸時評」 「群像」
齊藤末弘(1971)「解題」、椎名麟三『椎名麟三全集5』、p.533.
佐々木基一(1954.2.1.)「文芸時評」 「日本読書新聞」
椎名麟三(1982)『創作ノート』No.(2)、菁柿堂、p.3.~4.、9.
————(1977)『全集』20、冬樹社、p.260.
進藤純孝(1956.8.3.)「危機感の喪失 八月の小説から」 「北国新聞」
富岡幸一郎(1986)『戦後文学のアルケオロジー』、福武書店、p.224.
花森安治(1954.1.28.)「私の文芸時評」 「読売新聞」
平野謙(1954.2.2.)「二月の文芸作品を読む」 「北海道新聞」
山本健吉(1955.12.)「一九五五年の収穫 注目された今年(一)」 「文学界」

논문 투고 일자 : 2019. 10 .31.
논문 심사 일자 : 2019. 11. 03.
게재 확정 일자 : 2019. 11. 06.

17) 富岡幸一郎(1986)『戦後文学のアルケオロジー』、福武書店、p.224.

＜要旨＞

椎名麟三「罪なき罪」論
—キリスト教文学者の推理小説—

金慶湖

本稿では、椎名麟三「罪なき罪」を論じた。まず、この作品のテーマは、不幸やものごとを「絶対的」に捉えることへの警戒であり、それは椎名特有の復活信仰と関わっていた。椎名の言う「復活」は、「二重性」という言葉で書き換えられるのだが、その「二重性」とは、「死」と「生」という、二項対立し、決して相容れないもの同士が、イエス・キリストの「復活」により、同時に同じ次元でおさまり、並立できるようになったとする信念である。この椎名の「復活」理解を基に、イエスの説いた「悪いものに手向か」わず、「汝の仇を愛せよ」の教えを推理小説の形式で仕立てたのである。

A Study of Shiina Rinzo's *Innocent Sin* :
- The Detective Novel of a Christian Author -

Kim, Kyoung-Ho

This article discusses Shiina Rinzo's *Innocent Sin*. The theme of this novel revolved around being cautious in considering misfortunes and setbacks as "absolute" which was related to the reversion of the vertebral name. The term "Resurrection" is rewritten using the term "duality" a term that reflects the conflict between "death" and "life" and the dimensionality of Jesus Christ, which are never compatible. Based on this understanding of the "Resurrection" of the name did not "handle evil" while preaching the words of Jesus, but rather made Jesus's teaching of "Loving our enemies" in the form of a detective novel.